

論文

# 大学の日本語専攻の基礎段階における 主教材に関する比較研究

— 音声教育を中心に —

閻 慧

広島大学大学院文学研究科博士課程後期

Comparative research regarding the primary teaching material used for University  
level Japanese Language programme  
—Focusing on Audio Education—

YAN Hui

**Abstract:** Along with the development of globalization, higher communication skills required of people are becoming more demanding. To address this issue, individuals with high language ability are in high demand in the field of language education. However, one may observe that there is a tendency for individuals to neglect their original language and cultural background during the process of studying and adapting to a different language and culture. This means that an individual might not be able to promote his/her original cultural background, despite their fluency in a foreign language. Hence, the issue of “Localization” is then playing a major role in Language Education in the midst of globalization. According to the “Survey on Japanese-Language Education Abroad” conducted by The Japan Foundation in 2015, there were 3,651,715 Japanese learners in countries outside Japan. While the usage of textbooks published in Japan has increased since the publication of “Minna No Nihongo” (Everyone’s Japanese), the number of Japanese Language Proficiency Test (JLPT) applicants has increased to 750,252 (68,359 more than the number in 2014, a 10% increase). In the midst of the above, the problems concerning localization of Japanese Education overseas need to be discussed and reviewed constantly. Therefore, by focusing on the audio education accompanying textbooks published in Japan and China, this paper, from the perspective of language education, aims to clarify the characteristics of the localization occurring in audio education in China.

**Keywords:** Japanese Education, Audio, Textbooks, Localization

## 1. はじめに

グローバル化が進むにつれて、より高いコミュニケーション能力が要求され、それに対応するために、言語教育<sup>1</sup>の分野において、高い言語能力をもつ人が求められている。しかしながら、筆者の経験からすると、外国語や外国文化を勉強すればするほど、自言語、自文化などを疎かにする傾向がある。即ち、たとえ外国語を流暢に話せても、自文化を上手く発信できる能力をもっては限らないのである。そして、グローバル化における言語教育の中で、「本土化 (Localization)」<sup>2</sup>の問題がより大切になってくる。

国際交流基金が実施した「海外日本語教育機関調査」<sup>3</sup>によれば、2015年時点で海外における日本語学習者は3,651,715人であるという。また、『みんなの日本語』をはじめとする日本で出版された教科書が広く使われていると同時に、日本語能力試験 (JLPT) を受験する人が750,252人 (2014年に比べれば68,359人増) に達したのである。そのような中で、海外における日本語教育の本土化の問題に関しては、どのように進んでいるかについて検討する必要がある。そこで、本稿では言語教育の視点から、日中で出版された日本語教科書における音声教育に焦点を絞って、中国における音声教育の本土化の特徴を明らかにする。

## 2. 音声教育の現状と重要性

猪塚 (2005) は、日本国内において、学習者が学ぶ日本語教育機関では、現状、音声指導が計画的に行われていないと指摘している。さらに、指導の中心は、発話の明瞭さに関わる特殊拍 (長音・促音・撥音) や清濁などの単音であり、自然性に関わるアクセント・イントネーション・リズム・ポーズなどの韻律には、ほとんど時間が割かれていない (谷口 1991)。その理由として、時間的余裕がない、指導法が分からない、教材がない、音声は自然に身につくものという教師の教育観などが挙げられている。

また、日本語学習者数が最も多い中国・韓国をはじめ、海外における日本語教育は主に文法と語彙の学習に力を注ぎ、大学入試や就職などのために日本語能力試験 (JLPT) を目指している学習者も少なくない。これらは知識の積み上げが学習の主流になっていると言えよう。音声教育は、初級レベルの段階で文字教育とともに若干実施されてはいるが、それ以降はほとんど行われていないのが現状のようである。また、海外における日本語教師はほとん

ど自国の人が担当していて、十分な音声知識を身に付けているわけではない。そのため、学習者は日本語の音声的特徴はもちろん、自分の日本語発音にいかなる問題があるのかさえ把握できないまま学習を進めていくのである。

しかし、発音の誤りによって話者の意図の伝達に支障が生じる場合があるように、これは単に「発音が不正確、不自然である」ということではなく、コミュニケーションに関わる重要な問題である。水谷 (1987)<sup>4</sup>によれば、初期における音声指導は極めて重要である。母語に起因する問題もあり、母語別に学習者の問題点と注意点を整理しておく必要があるという。さらに、岩切 (2001)<sup>5</sup>では、正しい発音は基本中の基本であり、正しい発音の知識なくして、正しいリスニングはありえないと述べられている。これらの言及から、初中級の学習者に対する音声教育の重要性が窺われる。

そして、海外における日本語学習者にとっては、主な学習材料としての日本語教科書が与える影響は著しく大きいと思われる。そこで、本稿では教育活動の中心として使われる教科書を研究対象とすることにした。

### 3. 先行研究

#### 3.1 日本における音声教育の状況

土岐 (1986) は、1970年代から1980年代にかけての約15年間に刊行された主な教科書14種類について調査した。その結果、音声項目は、単音、音節、単語のレベルと分類しているのがほとんどであるが、プロミネンスやイントネーションなど文のレベルにまで言及しているものは多くないことがわかった。

また、河野 (1998) は、14種類の日本語教科書と副教材のイントロダクションにおいて、高さ(アクセント、イントネーション、プロミネンス)に関する音声項目の扱い方についての調査を行った。その結果、(1) 単語アクセントには触れられているが、連語のアクセントやイントネーションやプロミネンスなど、文レベルの特徴には触れられていないこと(2) イントネーションパターンの分類は、上昇・下降の2種類に分類したものが多く、といったことがわかっている。

更に、戸田ほか (2007) では、初級総合型教科書22種類、教科書に付属の翻訳文法解説書2種類、及び発音練習教科書3種類を対象に、それぞれの教科書のイントロダクションにおいて、どのような音声項目が取り上げられ、

どの程度の記載があるかを調査した。その結果、初級総合型教科書においては、ポーズ・プロミネンス・イントネーション・リズムに関する記述が極端に少ないこと、音声項目の記載がない教科書では、イントロダクション及び本文中に媒介語による解説もないこと、発音練習教科書においては従来の総合型教科書で欠落している韻律特徴がカバーされていること、などが明らかになっている。

以上の先行研究から、調査対象とされた教科書の出版時期に差があるにもかかわらず、ポーズ・プロミネンス・イントネーション・リズムについての扱いが非常に少ないという共通した結果が得られた。即ち、コミュニケーションにとって重要な韻律教育は日本語教科書の中でさほど重要視されていないということになる。

しかしながら、実際のコミュニケーション場面においては、正しく発音できるのみならず、自分の思いや気持ちをしっかり相手に伝えるための発話がより重要であろう。同時に相手の思いや気持ちを汲み取る能力も必要である。例えば、「そうですか」という表現はイントネーションによって疑問にもなったり、あいづちにもなったりする。また、「そうですね<sup>↑</sup>」と「そうですね<sup>↓</sup>」は同型なのに、イントネーションによって表現される意図が異なってくる。そういった内容が教科書に取り入れられるべきだと考えられる。

### 3.2 中国における音声教育の状況

中国の大陸にある大学で日本語専攻用教科書に関する研究は、あまり多くはない。曹大峰(2006)では、中国で出版された日本語教科書における音声指導について言及している。曹は、「日本語教科書データベース」の利用例として、中国の4種類の教科書における「有気音・無気音」、「母音の無声化」、「促音」などに関する解説を調べた結果、「有気音・無気音」と「母音の無声化」について全く触れていない教科書もあるということを示した。また、「促音」に関する解説は、4種類の教科書すべてにおいて見られるが、必ずしも分かりやすく説明しているとは限らないことが分かった。

台湾における教科書の研究は、河路由佳(1988)、王钰螢(2000)、蔡茂豊(2003)、林玉惠(2011)、王敏東(2007、2012)が挙げられる。河路(1988)は、領台時代から、子音、母音、音節、アクセントという4項目について学生の朗読テープから抽出し整理したその問題点が、現在も例外なく見られる

と述べた。また、改善法として、初級の主教材の文や語の提出順に、多少の音声的配慮を入れ、系統的な学習の積み重ねが望ましいと指摘した。また、林（2011）では、日本製初級用教科書と台湾製初級用教科書6種類を対象とし、収録語数、外来語の語数及び比率、各課の構成、話題選択及び場面設定、文化語彙の点から比較を行った。

香港における研究には、大久保雅子（2010）、趙晨（2014）、瀬尾匡輝ほか（2016）などが挙げられる。瀬尾（2016）では、香港で出版された教科書4冊を取り上げ、使用語彙、会話場面設定、練習問題の形式に焦点を当て、考察を行った。

以上の先行研究を踏まえ、中国における教科書に関する研究は、主に語彙、文法、会話に集中し、音声教育にはあまり言及していないようである。また、本土化の問題は議論する余地があると思われる。そこで、本稿では、日中で出版された基礎段階<sup>6</sup>に用いられる日本語専攻用教科書において、音声項目がどのように扱われているのかを調査、分析しながら、それぞれの特徴と傾向を見極め、日本語教科書の本土化の問題を考察していく。具体的には、以下の2つの課題を中心に調査・考察することとする。

- （1）音声に関する解説は、どのように配置されているか。
- （2）どのような音声項目が取り上げられ、どの程度の記載があるか。

#### 4. 日中で出版された日本語教科書からみる音声教育

今回取り上げた教科書は表1の通りである。

表1 日中で出版される日本語教科書

出版地	出版年	書名	著者	出版社
日本	1998	『みんなの日本語』 （『みんな』と省略）	スリーエネット ワーク	凡人社
	1998	『初級日本語げんき』 （『げんき』と省略）	坂野永理ほか	The Japan Times
	2011 （改訂）	『進学する人のための日本語』 （『進学』と省略）	国際学友会日本語学校編	国際学友会日本語学校
	2013	『まるごと 日本のこと ばと文化 理解篇1』 （『まるごと』と省略）	独立行政法人 国際交流 基金編著	三修社

中 国	大 陸	1993	『新編日語』 (『新編』と省略)	周平・陳小芬	上海外語教育出版社
		2004	『総合日語』 (『総合』と省略)	彭広陸・守屋三千代等	北京大学出版社
		2011	『基礎日語・総合教程』 (『基礎』と省略)	林洪・曹大峰等	高等教育出版社
	台湾	2010	『日本語讀本』 (『讀本』と省略)	蔡茂豊	致良出版社
	香港	2012	『新編日語通』 (『日語通』と省略)	望月貴子・野村和之・ 蔡穎心等	萬里機構・萬里書店

日本で出版されている教科書は、日本国内のみならず、海外においても広く使われている。例えば、筆者の調査した限りでは、台湾・香港・澳門の大学において、『みんなの日本語』『進学する人のための日本語』『学ぼう！にほんご』が多く使用されている。また、大陸において取り扱われる教科書については、2016年現時点では、大陸にある七つの外国語大学<sup>7</sup>のうち、五つの大学が『総合日語』を使っている。ほかの二つの大学では『基礎日語』（北京第二外国語学院編）と『新編日語』（上海外国語大学編）を使用している。日本で出版された教科書は日本語会話の授業や他の専攻の副専攻の教科書として広く使われている。

#### 4.1 音声解説の配置

日本で出版された教科書では、冒頭の箇所において音声について簡単な説明をしているのが一般的である。ところが、大陸・台湾・香港で刊行された日本語教科書においては、はじめの数課で集中的に日本語の音声について解説がなされ、練習することになっている。特に、『総合』では最初の箇所のみでなく、第1・2冊の各課において音声について解説がなされている。具体的に本稿で研究対象とした9種類の教科書における音声解説の配置は表2の通りである。

表2 各教科書における音声解説の配置

書名	配置される場所	ほかの解説	補助教材
『みんな』	はじめ	なし	『みんなの日本語初級1聴解 タスク25』 音声CD
『げんき』	Japanese Writing System	「読み書き編」 第1・2課	音声CD
『進学』	はじめ	付録	音声CD
『まるごと』	第1～2課	なし	音声ファイル
『新編』	第1～5課	なし	音声CD
『総合』	第1～4課	第1・2冊	音声CD
『基礎』	発音・文字篇	第6課	『基礎日本語聴解教材』 音声CD
『讀本』	第1～6課	なし	音声CD
『日語通』	第1～14課	なし	音声CD

表2から分かるように、どの教科書においても冒頭の箇所、音声についての解説がなされている。はじめの部分において、『みんな』『進学』は簡単な音声項目の紹介がなされ、『げんき』は、「Japanese Writing System」という箇所、音声指導を行っている。『まるごと』は第1・2課で説明がなされている。

一方、『新編』では第1課から第5課まで、『総合』では、第1課から第4課まで、また基礎段階の第1・2冊のほとんどの課においても「解説・音声」という箇所を設けて、音声指導を行っている。『基礎』においては、はじめに「発音・文字篇」というコラムを設けて、集中的に音声についての入門知識を解説しており、主には学習者中心に、タスク完成に重点が置かれている。『讀本』では、第1課から第6課まで、『日語通』は入門書において、第1～14課まで音声項目の紹介がなされる。

したがって、日本で出版された教科書は初めの部分のみで、中国で出版された教科書は冒頭の数課を中心に、集中的に音声指導が行われていることが分かった。中国の大学においては、ごく一部の学習者を除き、ゼロスタートで日本語を勉強しはじめる人がほとんどである。五十音図や仮名の読み方といった音声指導は、大学一年生の入門期に必ず行うものである。このような状況に応じて、初級総合型日本語教科書では、はじめの数課で日本語の音声について解説し、練習問題も設けられるのが一般的である。それは中国において、音声教育上の本土化のあらわれと言えよう。

## 4.2 音声項目の解説

次に、教科書ごとに具体的にどのような音声項目が取りあげられ、どの程度の記載がなされているのかについて考察してみたい。本稿では、『日本語教育機関におけるコース・デザイン』<sup>8</sup>が列挙した指導すべき音声項目をもとに、調査・分析を試みた。結果は表3の通りである。

表3 教科書ごとに取り上げられる音声項目

項目	みんな	げんき	進学	まるごと	新編	総合	基礎	讀本	日語通
五十音図	○	○	○	○	○	○	○	○	○
母音	△	—	—	△	○	△	△	—	○
子音	△	—	—	△	○	△	△	—	○
清濁	△	△	△	△	○	○	○	○	○
拗音	△	△	△	△	○	○	○	○	○
特殊音	○	○	○	△	○	○	○	○	○
調音法	—	—	—	—	○	○	△	—	○
無声化	△	△	△	—	△	○	○	—	△
ガ行	△	—	△	—	△	△	—	—	△
拍	○	—	—	—	△	○	—	—	—
リズム	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ア	○	○	○	—	○	○	○	○	○
イ	△	—	—	—	—	○	—	—	○
ボ	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ブ	—	—	—	—	—	—	—	—	—

※凡例：説明が詳しくされている「○」  
 極めて簡単な説明に終わっている「△」  
 触れていない「—」

「無声化」は「母音無声化」、「ガ行」は「ガ行鼻濁音」、「ア」は「アクセント」、「イ」は「イントネーション」、「ボ」は「ポーズ」、「ブ」は「プロミネンス」の省略である。

以上の内容を踏まえると、次のことが言える。

- (1) 五十音図、清濁、拗音、特殊音は、ほとんどの教科書が扱っている。特に、香港で出版された『日語通』においては、ひらがなとかたかなの字源<sup>9</sup>も取りあげていることが特徴的である。「母音」「子音」については、『新編』『日語通』では詳しく扱っているのに対し、ほかの教科書は簡単



な紹介をするだけで終わっている。また、「調音法」に関しては、大陸の『新編』『総合』及び香港の『日語通』でしか取り上げられていない。ほかには調音法という項目が設けられていない。例えば、『日語通』においては、次のような記述が見られた。

「し」 近乎國語的「西」，羅馬字以「shi」表示。注意「し」的輔音 /sh/ 與其他  
的 /s/ 不同，因為它的發音受到口蓋化的影響舌頭位置就比粵語「司」的輔音高，  
發音時舌尖緊貼口腔前端上部分，上齒後端」（「し」の発音は国語の「西」に似  
ていて、ローマ字では「shi」で表示され、特に「し」の /sh/ はほかの子音の  
/s/ とは違い、「し」の発音は口蓋化に影響されるため、舌の位置は粵語（広東  
語）の「司」より高く、発音する時は舌先が口腔の前上、上歯の後にきっちり  
付く）。

日本語の発音については、中国の普通話（標準語）、広東語の発音及び発音法といった本土の実情に合わせながら解説がなされる。

- (2) 「ガ行鼻濁音」については、『げんき』『まるごと』『基礎』『讀本』では扱われていないが、他の教科書では少し触れられている。「ガ行鼻濁音」は、現代の若者世代では次第に使われなくなる傾向がみられるが、日本語の音声の一つの特徴として、日本語を専攻とする学習者に対して説明する必要があると思われる。
- (3) 母音の無声化については、石井（2005）では、外国人に対する日本語教育における母音無声化の扱いが、教科書でも教えるべき要素であると指摘している。そこで、主専攻用教科書で提供したほうがより自然な日本語が習得できると思われる。しかし、『まるごと』『讀本』では言及していない。
- (4) 「拍」（モーラ）は『みんな』『総合』では詳しく説明されている一方、他の教科書においてはあまり触れられていない。
- (5) アクセントについては、どの教科書においても解説されている。主にアクセントの型、表記法、ルールを中心に説明がなされている。しかし、『げんき』においては、日本語のアクセントは地方差や個人差が激しい上

に、語形変化や単語の連結などによる変化も複雑で、アクセントにはあまり神経質にならず、文のイントネーションなども含め、できるだけモデル音声を模倣するようにといったような説明がなされている。一方、大陸・台湾・香港で出版された教科書はほとんどの課の新出単語でアクセント（数字表記）が付いていた。さらに、香港で出版された『日語通』においては、アクセントのルールを非常に詳しくまとめている。例：

- (ア) 詞語中毎個音有「高」和「低」的音調（一つ一つの音節には「高」「低」というアクセントがある）
- (イ) 詞語中の第一和第二個音節的音高一定不同，「高低」或「低高」（一つ目の音節と二つ目の音節の高さは必ず違う）
- (ウ) 一個詞語裏只有一個下降位，下降就不會再上升（一つの単語には一つの下降位があり、一旦下がればもう二度と上がらない）例：「木が（ki-ga）：高低；日本が（ni-ho-n-ga）：低高低低」

日本の教科書における単語のアクセントはほとんど「線と下がり目」と「下がり目をつける」といった表記法である。一方、中国の教科書はほとんど「数字表記」で示される。

例：日本の場合：「つくる→tsu kū ru」

中国の場合：「つくる ②」

「線と下がり目」「下がり目をつける」などといった表記法は学習者にとっては幾分分かりにくいと、中国では数字表記法を採用したと推測できよう。

- (6) 「イントネーション」についての説明は、『総合』『みんな』『日語通』のみに見られた。例えば、『総合』においては、「そうですか」について次のように解説されている。

「そうですか」の「か」、語気助詞「か」は疑問を表しているが、確認の気持ちを表したいときは、下降調に読まなければならない。

例、高橋：王さんのご家族は何人ですか。

王：3人です。両親とわたしです。わたしは一人っ子です。父はサラリーマンで、母は医者です。

高橋：そうですか。↓

『日語通』は、以下のような解説がみられる。

句末の語調不仅可以表達疑問 / 肯定等意思, 还可以表達出說話人的心情。疑問句的句末利用語調の上揚來表達疑問語氣。正如「そうですか *soudesuka* ˘ (這樣啊)」這個常用於回應和表達。雖然句末使用了常用的「か *ka*」讀成上升語調, 才能够表達疑問的意思 (「そうですか *soudesuka* ˆ (是嗎?)」)。但是, 如果將上升語調的「か *ka*」拉得太長, 句子將變成對對方所說內容深表懷疑的意思, 因此必須特別注意 (文末のイントネーションは疑問や肯定などの語氣を表すのみでなく、話し手の気持ちを表すこともできる。例えば:「そうですか *soudesuka* ˘ (這樣啊)」が応答や表現などに多用される。文末の「か *ka*」が上昇調になると、疑問の「そうですか *soudesuka* ˆ (是嗎?)」になる。しかし、「か」を長く伸びると、相手の話していることを疑われる可能性が高いので、要注意しなければならない)

さらに、台湾で出版された『進学する人のための日本語』(大新書局版)については、大新書局が版權を取って、新しく改訂を加えている。例えば、新出単語にアクセント記号が付いており、会話文にもイントネーションが付いているのである。そのため、学習者が自然に音調や音韻などを身に付け、堅固な基礎を打ち立てられると言えよう。そういう点から見ると、台湾において日本語教科書の本土化が大きな一歩を踏み出していると考えられる。

- (7) 「ポーズ」「プロミネンス」「リズム」といった文レベルの音声項目はどの教科書でも扱われていない。

さらに、中国人学習者にとって発音の弱点となりやすい「有(無)気音」と「有(無)声音」との違いについては、『新編』『総合』『日語通』で中国語、広東語と日本語の発音の特徴と違いを詳しく解説している。例えば、『新編』では、“注意日语语音的特点, 如嘴唇的活动不活泼, 发元音 [う] 时, 嘴唇不要像汉语 [乌] 那样突出, 那样圆, 从侧面看几乎是平的。再如日语的「え」和汉语的「e」不要混淆”(日本語の発音の特徴を注意し、唇はあまり動かさず、例えば「う」を発音する時、側面からみるとほとんど平らで、中国語の「乌」のように突出しないようにする)のような記述が見られた。『日語通』には、“對華語人而言, 令人為難的就是「う」, 即是元音 /u/。與國語、粵

語的「烏」字的發音相比，日語的 /u/ 舌頭突前很多，反而口唇圓不圓卻不大會影響聽話者的印象，但發音時口唇不要太突出”のような記述があった（中国人にとって、難しい項目の一つは「う」、即ち母音の「u」である。国語、広東語の「烏」に比べると、日本語の「u」は舌先を前にし、唇が丸いかどうかに関係なく、発音する時は唇が突出しなくてもいい）。そこから、母音「う」の説明においては、大陸と香港の解釈法が非常に似ているということが分かった。

以上の調査結果をまとめると、教科書ごとに取り上げられている音声項目は共通している箇所が多く、例えば、「五十音図」「清濁」「拗音」「特殊音」「ガ行鼻濁音」「母音の無声化」「アクセント」などを中心に解説が加えられている。ところが、「イントネーション」「ポーズ」「プロミネンス」といった文レベル、談話レベルの音声内容については、「イントネーション」は『みんな』『総合』『日語通』にはみられるが、「ポーズ」と「プロミネンス」はどの教科書においても触れられていないことが分かった。

さらに、吉岡（2008）<sup>10</sup>によると、日本で出版された47種類の総合型教科書のうち、8種類しか音声項目が設けられていないのである。また、本稿で取り扱った教科書からわかるように、音声項目についての解説が簡略化されているようである。日本における小学校の国語教科書は、簡単にひらがなとかたかなを紹介し、すぐ読解文などの単元に入るといった構成が一般的である。そこで、日本語教科書も国語教科書と同じようにデザインされる可能性が高いと推測できるだろう。

それに対して、中国で新しく出版・改訂された教科書は、中国本土の学習者向けということを配慮し、音声に関する基礎知識が重要視されると言えよう。しかしながら、台湾における日本語教育は、植民地時代において、「国語教育」の名称で行われ、その後も強く日本の影響を受けた（蔡1989）。そのため、教科書のデザインなどが日本で出版された教科書に非常に似ているのである。さらに、蔡（2010）では、台湾の日本語学習者のために作成された教科書は限られた数しかなく、ほとんどが日本の教科書の複製品で、日本の影響に離れないと指摘していた。今回取り扱った『讀本』からは、そういった状況が確認される。

このように、日本で出版された教科書における音声項目は、ただ知識として簡単な解説がなされ、後は主に文法や会話などに重点が置かれているよう

である。それに対して、中国で出版された日本語教科書では、学習の最初の段階から発音を一つ大切な技能として、日中両言語の相違や学習者がよく間違っていることを十分配慮し、音声指導を行っていることがわかる。

### 4.3 韓国で出版された教科書からみる音声教育

日本語学習者が多い韓国で出版された教科書『うきうき』(2006)、『現代日本語第一歩』(2013)、『集中日本語』(2015)においては、はじめの箇所では、簡単にひらがな、かたかな、濁音、拗音、特殊音が紹介されるだけである。さらに、どの教科書も単語にはアクセントが付いていない。韓国人日本語学習者の2人にインタビューを行った結果、アクセントを勉強した時、主にはNHKが出版した『日本語発音アクセント辞典』を参考にし、あるいは実際に日本人との接触によって習得するということであった。

中国においては、語文<sup>11</sup>を勉強する時、漢字を習うことが第一歩である。そして、声調(アクセント)<sup>12</sup>が非常に重要になってくる。読解や作文などの勉強に入るまで、小学校1～2年生は基礎漢字1600～1800字<sup>13</sup>を習得しなければならない。そのため、小学校からアクセントを重要視する伝統があるため、外国語教育における音声教育も非常に重要視される。中国における日本語教育ではアクセントを非常に大切に扱っているのである。今回取り上げた『総合』においては、第1冊から第2冊にかけて、主に出現する動詞、形容詞が活用する時のアクセント、「数量詞+助数詞」のアクセント、及び文法形式が語に接続する時のアクセントなどを中心に解説がなされている。活用形のアクセントは学習者にとって難しいとされてきたが、従来の教科書ではさほど重視されていないようである。『総合』では、「使える①→つかえそうだ③<sup>14</sup>」のように、言語形式の後ろから音節を数え、ⓧでアクセントを示すやり方を試みており、アクセント指導において、新しい工夫をしていると言えよう。このように、アクセントのルールについての説明や解説を各課において積み重ねることを通して、最初の段階から学習者に正しいアクセントで日本語を話させるように工夫しているのである。

## 5. おわりに

音声教育は、日本語学習の最初に行われ、また日本語学習者の正しい発音で表現する能力に緊密に関わっており、従来から着実に行うべき教授項目と

されている。

本稿は、言語教育の視点から見た日中で出版された日本語教科書における音声教育を比較した。その結果、日本で出版された教科書においては、はじめの箇所ですimpleな音声項目を紹介するにとどまっていることがわかった。一方、中国で出版された教科書では、学習者の実情に合わせ、冒頭の数課で集中的に五十音図、清濁、ガ行鼻濁音、母音の無声化、アクセントなどについて詳しく紹介がなされることが明らかになった。さらに、中国本土における学習者向けということを配慮し、母国語との共通点と相違点を説明しながら日本語音声の特徴を紹介される。そこから、中国における日本語音声教育の本土化が評価できると言えよう。

一方、台湾における日本語教育は、領台時代から強く日本の影響を受け、教科書のデザインも日本のものに似ている。王敏東（2013）は、台湾で日本語を教える時、日本で出版された教科書をそのまま使用することには、慎重に考えなければならないと述べた。しかしながら、近年『進学する人のための日本語』（大新書局版）をはじめ、文レベルのイントネーションが付いており、ある程度音声教育の本土化が進んでいると言えよう。今後続けて考察する必要がある。

現在、日本語教科書が多様化の時代を迎え、日本語教科書が不足しているということではなく、多様化している学習者によりふさわしい教科書が不足しているのである。即ち、教科書の問題は量の不足から、質の問題に転換していると言えよう。そこで、海外における日本語教育については、できるだけ本土の特徴や学習者の慣習などに合わせ、教科書を作成したほうが学習者にとっては、より受け入れやすいだろう。

また、今回取り扱った教科書の数が限られるため、一般化するには限界がある。今後は教科書の数を増やし、その特徴と傾向を一層明らかにしていきたい。

## 注

<sup>1</sup> 言語教育とは、音声や文字などの系統的指導を通して、言語能力、言語技能の習得を目的とする教育のことである。

<sup>2</sup> 瀬尾（2016）では、「地域化（Localization）」という訳語が使われている。実際に大陸・台湾・香港では「本土化」「在地化」が多用されるため、本稿では「本土化」を採用

用することにした。具体的には、「教育が営まれる現地や現場の特徴に合わせ、学習者のニーズや学習習慣などに基づいて、教育政策を改訂したり、教科書を作成したり、教授法を変えたりして行われた教育の過程のことである」。

<sup>3</sup> 国際交流基金（2016）「海外日本語教育機関調査」による。

<sup>4</sup> 水谷信子（1987）『日本語教師養成通信講座3－1日本語教授法2（1）』アルク p.27

<sup>5</sup> 岩切信正（2001）『やっぱりリスニング』ベル出版 p.31

<sup>6</sup> 基礎段階：本稿では初中級を中心に、即ち、1・2年生を研究対象とする。

<sup>7</sup> 7つの外国語大学は、北京外国語大学、北京第二外国語大学、上海外国語大学、天津外国語大学、西安外国語大学、四川外国語大学、広東外国語大学である。

<sup>8</sup> 『日本語教育機関におけるコース・デザイン』（1991）日本語教育学会編 凡人社

<sup>9</sup> 字源は、仮名などのもともなった漢字のことである。例：平仮名「あ」の字源は「安」で、片仮名は「阿」である。

<sup>10</sup> 吉岡英幸（2008）『徹底ガイド日本語教材』凡人社

<sup>11</sup> 語文は、日本の「国語」に当たる。

<sup>12</sup> 声調は、中国語の音節ごとの高低の変化を表す。普通話（標準語）には4つの声調があるのに対して、広東語には8つの声調がある。中国語では、声調の違いが意味を区別することができる。

<sup>13</sup> 『全日制義務教育語文課程標準』（2001）中華人民共和国教育部 北京師範大学出版社

<sup>14</sup> ㊦ (⊗) は、アクセント核の表記法である。アクセント核は、高低アクセントにおいて、その下がる直前の拍（または音節）にあると考えられる。本稿では、アクセント型を区別する重要な要素と見なしている。

## 参考文献

- 猪塚恵美子（2005）「学習者に発音を意識させましょう」日本語教育研究所主催講演
- 石崎晶子（2005）「日本語の音読において学習者はどのようにポーズをおくか」『世界の日本語教育 日本語教育論』15 pp.75－89
- 大久保雅子（2010）「日本語学習におけるナ行音・ラ行音の聴取混同—香港広東語母語話者を対象として」『早稲田日本語教育学』（5－7）pp.97－109
- 王敏東（2012）「台湾における日本語文法の教材について」『日本学刊』14 香港日本語教育研究会 pp.106－122
- （2013）「我国非日語系大学生心目中好的日語教材—問卷調查結果與日本的比較」『教科書研究』6（1） pp.31－55
- 王钰螢（2000）「台湾における初級日本語教科書の語彙—大学日本語学科「初級日本語」を中心に」『名古屋大学大学院文学研究科』
- 河野俊之（1999）「日本語教科書のイントロダクションにおける音声項目の扱い方」『総合文化研究所紀要』第16巻 pp.17-25
- 河原崎幹夫・吉川武時・吉岡英幸（1992）『日本語教材概説』北星堂書店

- 河路由佳 (1988) 「台湾語を母語とする日本語学習者の音声教育について—音節、アクセントを中心に—」『国際学会日本語学校紀要』13 pp.56 - 69
- 佐藤友則 (1995) 「単音と韻律が日本語音声の評価に与える影響力の比較」『世界の日本語教育 日本語教育論』5 pp.139 - 154
- 曹大峰 (2006a) 「日本語教科書データベースの構築とその応用研究」曹大峰編『日語教学与教材創新研究—日語專業基礎課程綜合研究』高等教育出版社 pp.16-25
- (2011a) 「内容と能力を重視した日本語教育へ向けて—中国語母語話者向けの新しい日本語教材の開発研究事例」『日本語／日本語教育研究』2 ココ出版
- (2011b) 「日本語教材における『日本文化理解』の試みと課題—中国の日本語教育の事例報告」修剛・李運博編『異文化コミュニケーションのための日本語教育1』高等教育出版社 pp.27-29
- 蔡茂豊 (1989) 『台湾における日本語教育の史的研究— 一八九五年～一九四五年』東呉大学日本文化研究所
- (2003) 「台湾における日本語教育の教材」『台湾における日本語教育の史的研究 (下) 1895年～2002年』大新書局 pp.62 - 124
- 瀬尾匡輝・青山玲二郎・米本和弘 (2016) 「現地で出版された教科書がなぜ使われないか—教材分析と現地の日本語教師へのインタビューを通した—考察—」『日本学刊』19 pp.121-135
- 谷口聡人 (1991) 「音声教育の現状と問題点—アンケート調査の結果について—」『日本語音声の韻律的特徴と日本語教育—シンポジウム報告—』
- 趙晨・鄒彤・滕安麗 (2014) 「生教材を活用したタスクベースの会話教材の開発」『日本学刊』17 pp.133 - 149
- 串田真知子・城生伯太郎・築地伸美・松崎寛・劉銘傑 (1995) 「自然な日本語音声への効果的アプローチ：ブロンディーグラフ—中国人学習者のための音声教育教材の開発—」『日本語教育』86 pp.39 - 51
- 寺田昌代 (2015) 「中国国内の音声教育事情：大学の日本語学科における発音指導」『言語科学研究 神田外語大学大学院紀要』21 pp.89 - 99
- 土岐哲 (1986) 「音声教育の面から見た教科書」『日本語教育』59号 pp.24-37
- (1991) 「音声の指導」『講座 日本語と日本語教育』第13巻 寺村秀夫編『日本語教育教授法 (上)』明治書院 pp.111-138
- 戸田貴子・生方哲男・大久保雅子・尹孝禎 (2007) 「日本語教材における音声項目に関する—考察—」日本語教育と音声研究会 (早稲田大学) 2007年7月
- 轟木靖子・山下直子 (2009) 「日本語学習者に対する音声教育についての考え方—教師への質問紙調査より—」『香川大学教育実践総合研究』18 pp.45 - 51
- 平野宏子・広瀬啓吉・河合剛・峯松信明 (2009b) 「母語話者と中国語話者の日本語朗読音声の基本周波数パターンの比較」『日本音響学会誌』65 (2) pp.69 - 80
- 安田麗・林良子 (2011) 「日本語学習者における母音無声化：台湾人日本語学習者、東京・近畿方言話者を対象に」『音声研究』15 (2) pp.1 - 10



- 楊孟勳（2011）「台湾の日本語専攻学習者の学習困難度と継続ストラテジーとの関連」『人間文化創成科学論集』14 pp.147 - 155
- 劉佳琦（2014）「中国における音声教育の現状と課題—復旦大学日本語学科の取組みから—」『早稲田日本語教育学』14 - 16 pp.105 - 116
- 林玉恵（2011）「台湾で使用されている日本語初級教科書の種類とその特徴」『山形大学大学院文化システム研究か紀要』8 pp.117 - 132